

第2章 勉学態度

1.勉学態度

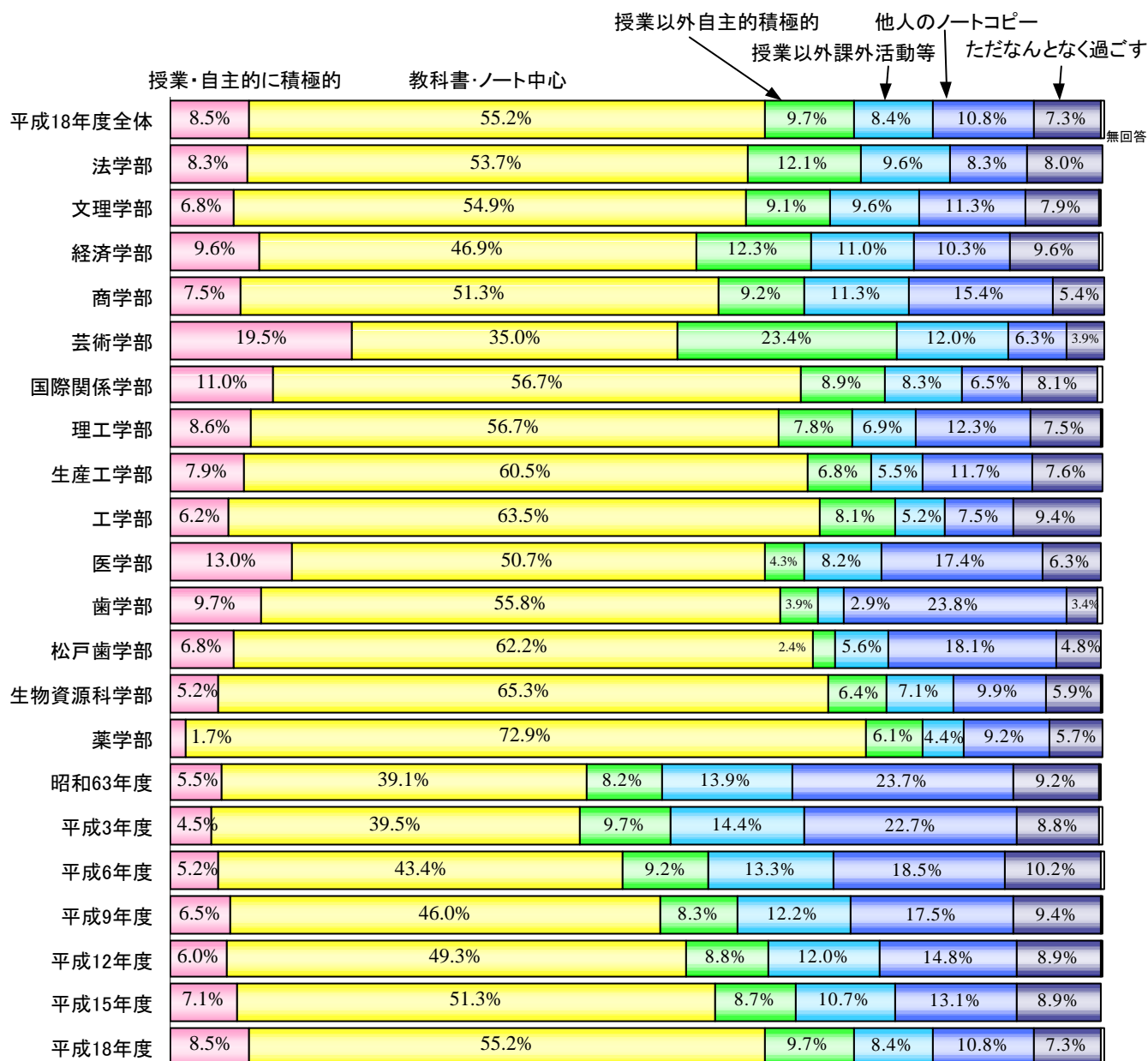
「教科書・ノートを中心に必要単位を取得」が過半数。

芸術学部の学生は「授業や自主的テーマ」や「授業より自分で」積極的勉学の比率が高い。カリキュラム重視で単位取得に取り組む学生と積極的勉学態度の学生の増加傾向が顕著。

勉学態度を見ると、「教科書・ノートを中心に必要単位を取得」するようにしている学生が全体の55.2%で、各学部ともこの勉学態度がトップとなっています。

芸術学部の学生は、カリキュラム構成の違いによるのかも知れませんが、「授業より自分で積極的なテーマにとりくみ勉学」が23.4%、「授業や自主的テーマで積極的に勉学」が19.5%と、自主的な積極的勉学を行なっている比率が高くなっています。

経年変化を見ると、「教科書・ノート中心」が増加し、一方で「他人のノートのコピーで適当にすませている」が減少という傾向がみられ、カリキュラムに忠実に単位取得に取り組むといった勉学態度の学生が確実に増加していることがわかります。また、「自主的に積極的」な勉学態度の学生も増加傾向にあります。



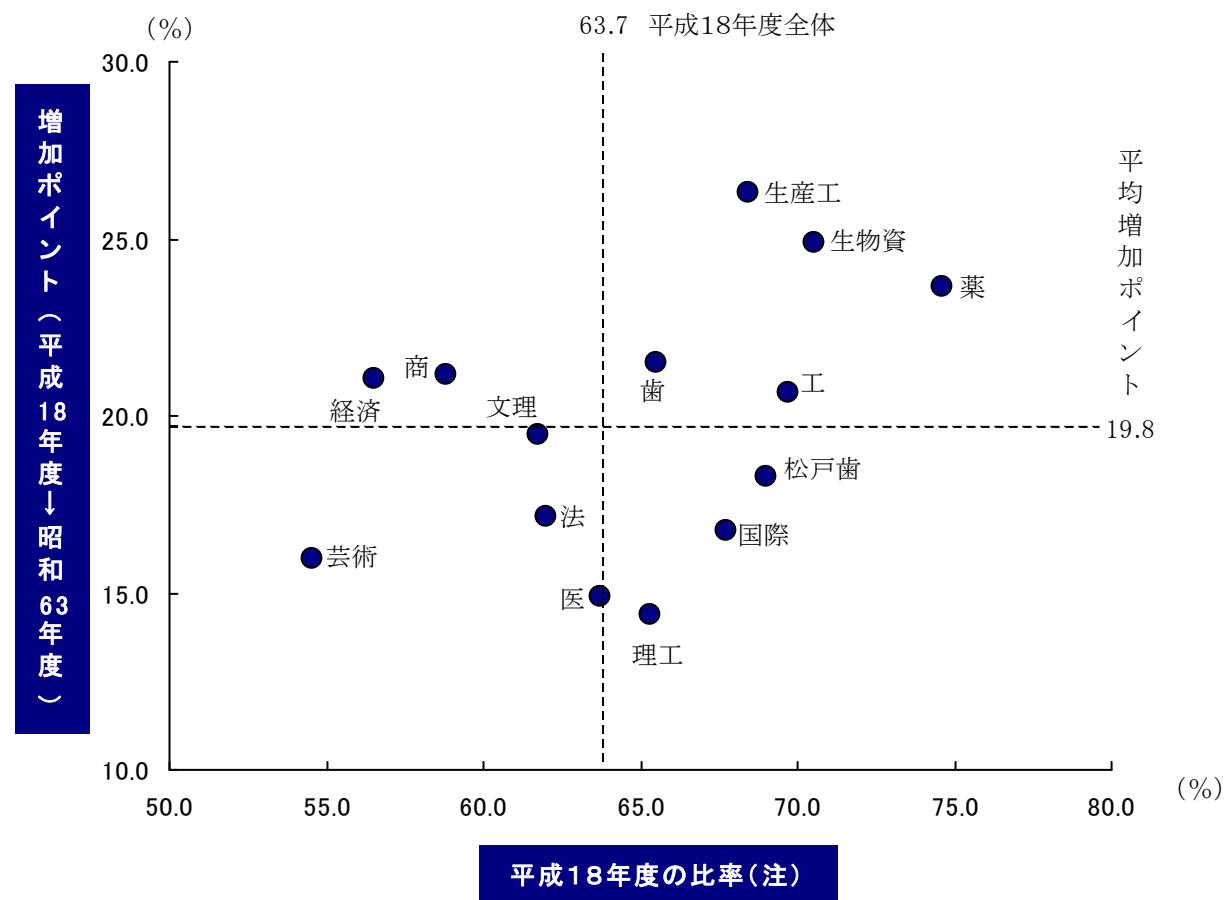
2.学部別 勉学態度の向上率

18年前に比べ、最も勉学態度が向上した学部は生産工学部。次いで生物資源科学部。医学部・歯学部も短期間に向上。教育改革施行の成果の表われか？

「教科書・ノートを中心に必要単位を取得」に「授業や自主的で積極的な勉学」を加えた比較的主めな勉学態度が、第1回調査時（18年前の昭和63年度）に比べてどのくらい増加したのかを学部別に見たものが下図です。全ての学部で増加しており、勉学態度が向上していることがわかります。最も増加ポイントが高かった学部は生産工学部でした。平成16年度の大規模なカリキュラム改正が影響しているのかもしれませんが。

今回調査で比較的主めな勉学態度の学生の比率が最も高かったのは薬学部でしたが、増加のポイントでは生物資源科学部に次いで3番目となっています。過去の調査では医学部・歯学部では「他人のノートのコピーを利用」する学生が多く勉学態度の向上率が低いとされてきましたが、3年前の調査と比較すると、医学部で9.9ポイント、歯学部で16.0ポイントと大きくアップしています。共にカリキュラム改正によるチュートリアル教育の実施による成果が表われていると言えるかもしれません。

学部別、比較的主めな勉学態度の向上率



(注) 「授業や自主的で積極的な勉学」と

「教科書・ノートを中心に必要単位を取得」の%の合計

3.学部別 勉学態度の経年変化

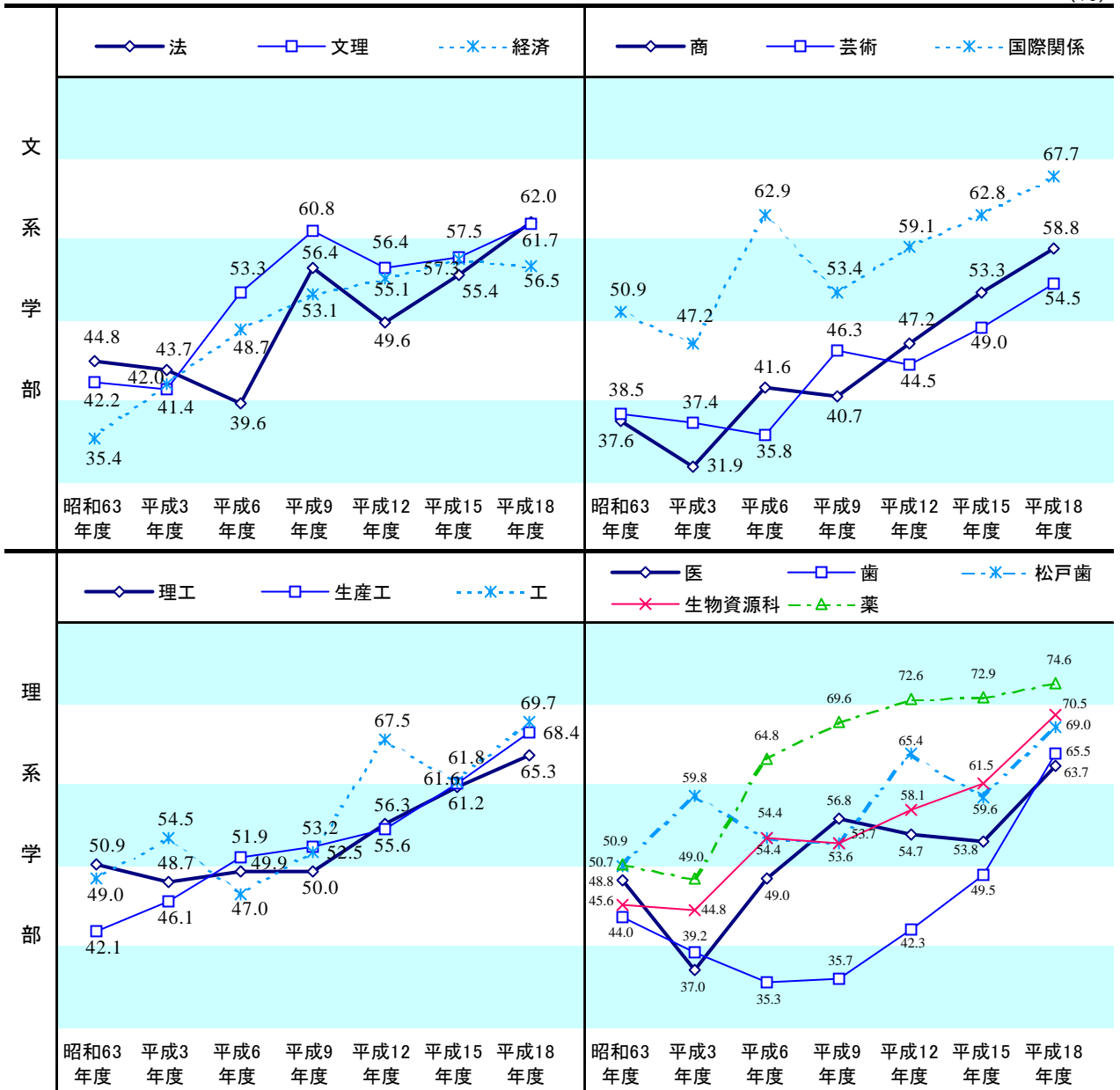
国際関係学部と薬学部は平成6年度，法学部は9年度，工学部は12年度に勉学態度が急上昇。
各学部ともそれぞれの教育改革に対する取り組みが学生の勉学態度向上に影響大。

前ページで考察した勉学態度の向上率（「教科書・ノートを中心に必要単位を取得」＋「授業や自主的で積極的な勉学」）の学部別経年変化を見たものが下図です。

各学部とも全体として右肩上がりの向上傾向を示していますが，学部により短期間に急上昇した時期があることがわかります。例えば法学部では平成6年度から平成9年度の3年間に39.6%から59.4%と16.8ポイント増，同様に国際関係学部と薬学部は平成6年度，工学部は平成12年度にそれぞれ3年前より15ポイント以上増加しています。商学部では平成3年度の31.9%から今回の15年間に26.9ポイント増とほぼ直線的な増加がみられます。各学部とも，教育改革の取り組みに伴って，学生の勉学態度に大きく向上していることがうかがえます。特に歯学部では平成9年度から30ポイントと上昇幅が大きく，平成12年度入学者から実施された新カリキュラムによる教育の成果が浮き彫りになっています。

学部別、比較的熱心な勉学態度の経年変化

(%)



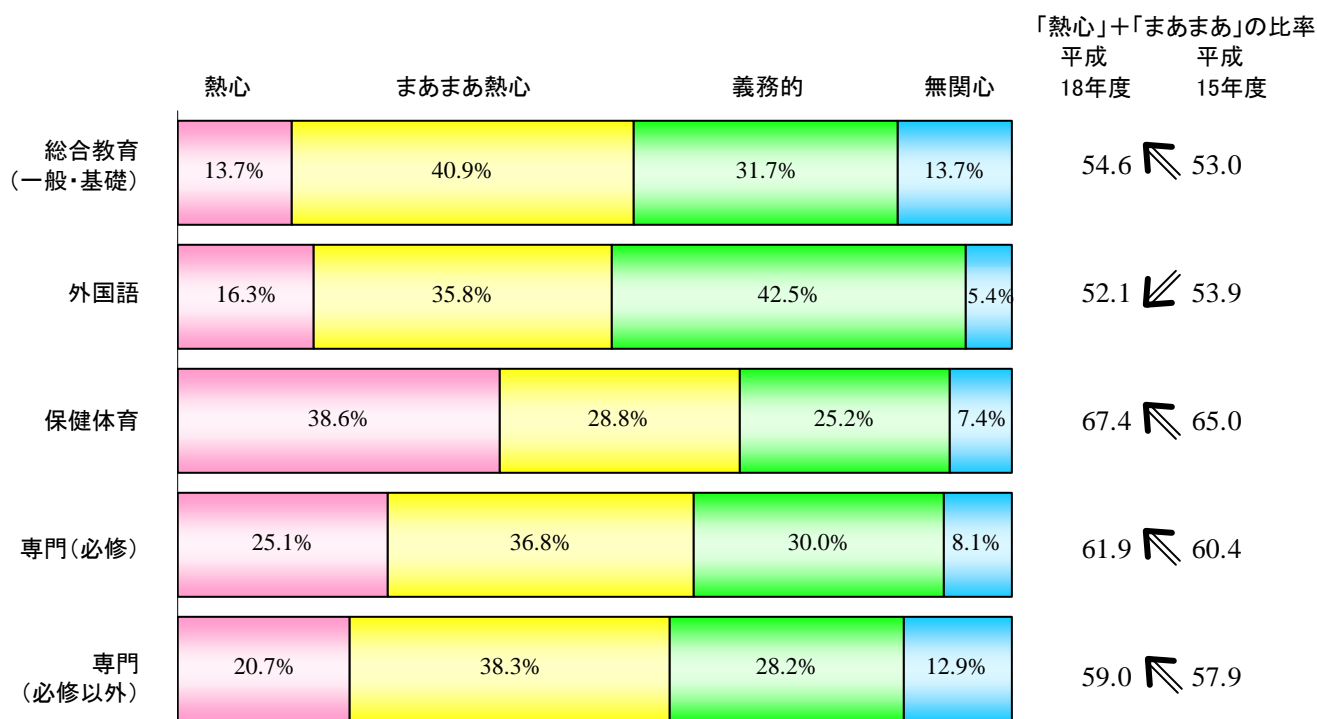
(注) 「授業や自主的で積極的な勉学」と「教科書・ノートを中心に必要単位を取得」の%の合計

4.授業態度

過半数の学生が熱心に授業を受けており、義務的な態度は3割程度。
3年前の調査時に比べ、外国語を除き一般的に熱心度がややアップ。

総合教育（一般・基礎）科目の授業について日大生全体の授業態度をみると、「授業に関心があり熱心だった」が13.7%、「まあまあ熱心に聞いていた」が40.9%となっており、両者を加えると54.6%の学生が熱心な態度で受けています。「試験が不安だから聞いていた」「出席をとるから義務感で出ていた」といった「義務的」態度の学生は31.7%、「ほとんど聞いていない」「他のことをやっている」など「無関心」層は13.7%でした。

「熱心」と「まあまあ」を加えた比率をみると、保健体育が67.4%で最も高く、次いで専門科目の必修授業（61.9%）、専門科目の必修以外の授業（59.0%）の順で高くなっています。外国語は「義務的」態度が42.5%と高くなっています。前回調査（平成15年度）と比較すると外国語以外は1～2ポイント高くなっており、一般的に見てわずかですが熱心度がアップしています。

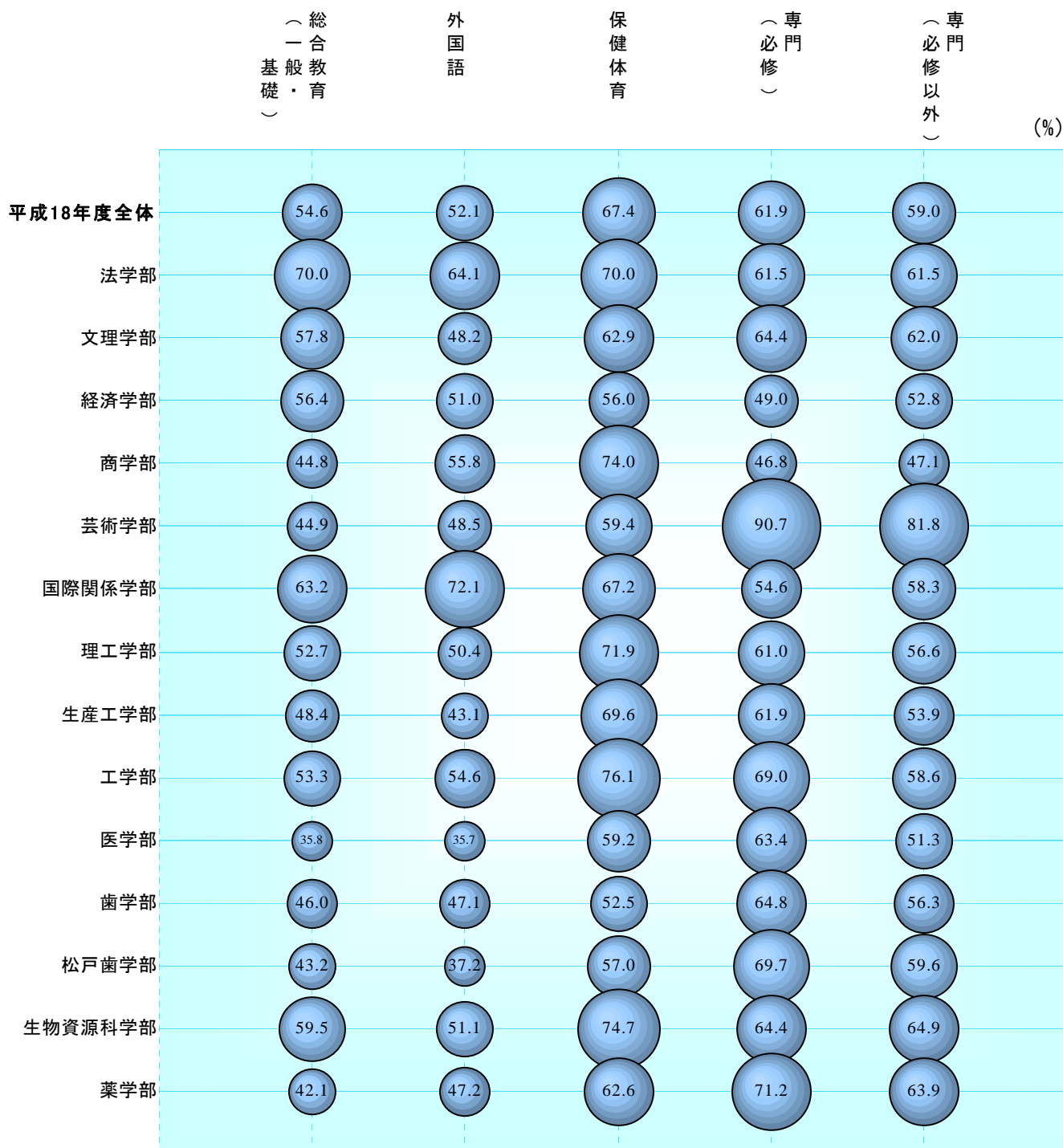


(注) 「義務的」は「試験が不安」「出席をとるから」の合計、「無関心」はそれ以外の合計

5.学部別 授業態度(熱心さ)

専門科目の授業に熱心な学生の比率が最も高い学部は芸術学部。
 医学部・歯学部系と薬学部の学生は、専門科目に対して熱心な反面、
 総合教育科目と外国語に対しては熱心でない学生の比率が高い傾向。

授業態度について「熱心」と「まあまあ」を加えた比率を学部別に見ると、芸術学部では専門(必修)で90.7%、専門(必修以外)で81.8%と専門科目に対する熱心度が強い点が目立っています。医学部・歯学部系と薬学部では、専門(必修)に対して熱心な学生の比率が最も高く、一方で総合教育(一般・基礎)と外国語に対して熱心な学生の比率は低いといった傾向がみられます。法学部では総合教育科目、国際関係学部では外国語に熱心な学生の比率が高くなっています。



6.空き時間に過ごす友達の数

空き時間に一人で過ごす学生が3分の1。2～3人と少数の友達と過ごす学生は4割。
一緒に過ごす学友の少人数化傾向が年々顕著に。

全体で見ると、学内で空き時間ができた時に一人で過ごす学生が34.4%となっています。友達と共に過ごす学生は64.3%ですが、「二人」が23.4%、「三人」が17.7%、「四人以上」が23.2%となっており、2～3人の少人数で過ごす学生が4割と多い点に気がきます。一人で過ごす学生の比率の高い学部は法学部（53.4%）と芸術学部（44.3%）です。薬学部では四人以上と多人数で過ごす学生が47.2%と高いといった特徴がみられます。

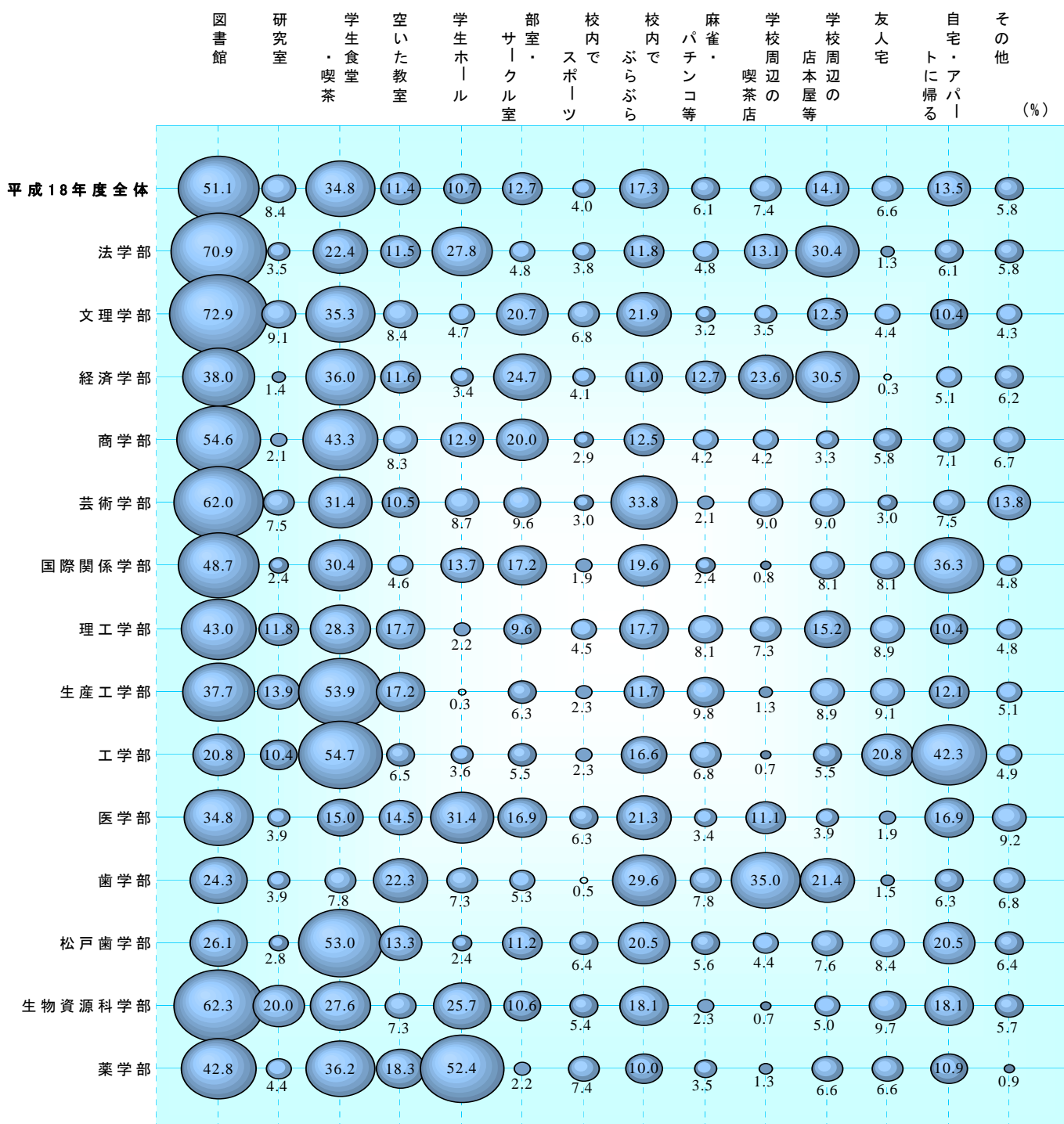
経年変化を見ると、一人で過ごす学生の比率が昭和63年度の17.3%から今回の34.4%まで毎回増加し、四人以上が同47.2%から23.2%まで毎回減少しており、少人数で過ごす傾向が顕著に表われています。



7. 空き時間を過ごす場所

空き時間を過ごす場所のトップは「図書館」で、過半数の学生が利用。
図書館の設備が充実している学部で、その利用率が高い。

学内で空き時間ができた場合の過ごす場所を見ると、「図書館」が51.1%で最も高く、次いで「学生食堂・喫茶」(34.8)「校内でぶらぶら」(17.3%)の順となっています。近年図書館がリニューアルされた法学部と文理学部では「図書館」が70%台となっており、学生に強く支持されていることがうかがえます。工学部と松戸歯学部は「学生食堂・喫茶」、薬学部は「学生ホール」、歯学部は「学校周辺の喫茶店」がトップとなっています。



8. 空き時間を過ごす場所—今回ベスト5の経年変化

空き時間を「図書館」で過ごす学生が大幅に増加。
図書館の多機能化・リニューアルが学内での学生の行動に大きく影響。

学内で空き時間ができた場合の過ごす場所を経年変化で見ると、「図書館」が昭和63年度の35.6%から上昇傾向にあり、今回平成18年度の51.1%まで15.5ポイントもアップしています。法学部と文理学部では3年前の調査時より20ポイント以上増加しており、その間に実施された図書館のリニューアルの効果が顕著に表われています。両学部の学生にとっては現在、図書館が文字通りアメニティー空間となっていることがうかがえます。

対照的に、「学生食堂・喫茶」の比率が18年間で52.1%から34.8%まで17.3ポイントと大きく減少、「自宅・アパートに帰る」も逡減傾向にあります。蔵書数の充実、IT技術の利用による検索・閲覧システムなどの導入、一部でのラウンジコーナーの設置など「図書館」の多機能化が進展してきたことによって学生の活用度が増し、学内での生活行動にも変化をもたらしていることがわかります。

平成18年度ベスト5の経年変化

